

〔報 告〕

## 家族援助における看護職の思考内容の特徴 —軽度発達遅滞の児をもつ家族に対する家庭訪問援助過程 における看護職の思考内容の分析から—

佐藤 紀子

### 要 旨

本研究は、家族援助における看護職の思考内容の特徴を明らかにすることによって、家族の捉え方および援助のあり方を検討した。研究対象は、筆者自らが看護職の立場で継続的に実施した家庭訪問援助において、筆者が訪問ごとに、訪問を終えて次の訪問までに実施した援助を振り返って思考する内容とした。その思考内容を、看護過程に沿って分類整理し、質的に分析した。その結果、看護職は、家族員一人ひとりを捉える視点、家族員どうしの関係性を捉える視点、家族員と社会との関係性を捉える視点、それらを家族全体として統合する視点を何度も往き来しながら、家族を捉えていくという思考の特徴が見いだされた。また、家族員一人ひとりと信頼関係を築いていくこと、中立の立場で関わること、家族生活の継続性を認識することを、家族に対する基本的な援助姿勢として重視していることが明らかになった。さらに、家族員一人ひとりが、豊かな健康生活を送れているかに焦点をあてることが重要で、それを家族員どうしが互いに認め合い、支え合って維持していけるよう支援していくことが家族援助のあり方ではないかという、家族援助の目的と意図に関わる示唆が得られた。

キーワード：家族援助、看護職の思考内容、家庭訪問援助

### 1. はじめに

わが国では近年、核家族化や少子高齢化、保健医療福祉システムの変革に伴い、家族ケアへの関心は一段と高まってきている。看護学においても、家族に対する看護は、どの看護の対象領域でも必要不可欠なものという考えが浸透し、患者と家族とを一体のものと見て、多くの看護職が家族にもケアを試みはじめている<sup>1)</sup>。しかし家族看護の学問的アイデンティティは未だ十分確立されたとはいえず<sup>2)</sup>、特に家族のとらえ方やその範囲、さらに働きかけの方法などに論議の余地があると指摘されている<sup>3)</sup>。

筆者は先行研究において<sup>4)</sup>、看護職が実施する家庭訪問援助内容から、家族員一人ひとりに対する援

助の実態を明らかにすることにより、育児や介護という日常の家族生活の営みを支える家族援助のあり方を検討した。その結果、個々の家族員に対する援助行為には、健康管理を促す、生活状況を整えるなどの健康生活を支えるものと、育児や介護の関心を高める、対処能力を向上させるなどの育児や介護のケア力を高めるものが存在しており、個々の家族員に実践した援助が、育児や介護の受け手の生活を支える援助の基盤となっていることが確認できた。また、実施した援助行為には、毎回の訪問ごとに実施した援助を振り返った看護職の思考内容が大きく反映していることを確認し、その重要性が示唆された。この実施した援助を振り返る看護職の思考は、家庭訪問の場で看護職が捉えたり考えたことをもう一度再現し、その再現過程のなかで問題を捉えなおしたり、さらに新たな気づきが生じたりすることで、援助課題

をより明確にするものであった。

したがってこの訪問を終えて次回の訪問までに思考する内容には、看護職として家族をどのように理解し、どのように支援していくかという、家族援助実践の根底となる看護職の認識が凝集していると考えられる。

## II. 目的

本研究では、看護における家族の捉え方および援助のあり方を検討するために、家庭訪問援助における訪問を終えて次回の訪問までに看護職が思考する内容に注目し、そこから家族援助における看護職の思考内容の特徴を明らかにすることを目的とする。

## III. 方法

### 1. 研究対象

看護職が家庭訪問援助において、訪問を終えて次回の訪問までに思考する内容を研究対象とする。分析対象事例は、軽度の発達遅滞の児をもつ1家族とする。家族に対しては、家庭訪問援助のなかで、援助内容を研究素材とすることの承諾を得た。分析対象事例の概要および訪問状況は表1のとおりである。

### 2. 研究素材の作成

筆者自らが看護職の立場で、分析対象事例に対して継続的に家庭訪問を実施する。1回の訪問が終了するごとに、実施した援助を振り返り、それ以降の援助に向けて筆者が考えたことを詳細に記録する。

### 3. 分析方法

1) 記述した思考内容を、「どの家族員について、何を考えたのか」というひとまとまりの単文に記述しなおし、1件として計上し、データ化する。

2) 各データを、家族員別に時系列に整理しなおし、「何を考えたのか」という思考内容を、看護過程に沿って次の4つの観点から分類整理する。

#### ①援助ニーズに関する思考内容

#### ②援助の方向性に関する思考内容

表1. 分析対象事例の概要

本児の状況	5歳8ヶ月(男児)、軽度精神発達遅滞、幼稚園に通園
家族の状況	母親(34歳)無職、父親(41歳)高校教諭、祖父(73歳)無職、祖母(71歳)無職、妹(3歳)幼稚園
事例の概要	平成10年2月本児が3歳のときに、幼稚園から「オウム返しが目立ち、見立て遊びができないなど気になる」と保健センターに連絡があった。その後、保健センター実施の幼児教室で継続支援してきた。援助方針は、本児には経験不足からくる遅れが見受けられること、母親が本児の関わりに自信が持てないことに対し、親子の関わりを促すとともに、遊びをとおして発達を促していくことであった。しかし、平成12年4月より、幼児教室の不参加が続いていた。
筆者の援助期間	H12. 6. 7～H12. 9. 22(計6回訪問)
家族員との面会状況 ( )内は回数	本児(4)、母親(6)、父親(0)、祖父(2)、祖母(6)、妹(4)

#### ③援助方法に関する思考内容

#### ④援助の評価に関する思考内容

3) 分類したデータに関して、データ間に共通する意味内容を集め、その内容を簡潔に表現する。

4) さらに、家族援助に重要となる思考を明らかにする観点から、共通する意味を表すサブタイトルをつける。

5) さらに、サブタイトル間に共通する意味を表すタイトルをつける。

6) 以上の分析結果から、家族援助における思考内容の特徴を明らかにし、家族の捉え方および援助のあり方を検討する。

## IV. 結果

### 1. 件数からみた思考内容の全容

思考内容は、全部で407件にデータ化された。

家族員別にみると、本児62件、母親163件、父親42件、祖父73件、祖母44件、本児の妹23件であった。

内容別にみると、援助ニーズに関する思考内容53件、援助の方向性に関する思考内容56件、援助方法に関する思考内容95件、援助の評価に関する思考内容203件であった。

### 2. 4つに分類した思考内容の分析結果(表2)

表2. 家族援助過程における看護職の思考内容

	看護職の思考内容	サブタイトル	タイトル
援助ニーズ	<p>児の発育発達上の問題が、日常生活に及ぼす影響はないか                      児の問題が、同胞の発育発達や家族員の健康状態および日常生活への影響に問題はないか</p>	<p>児の援助ニーズを明確にする</p>	<p>援助ニーズの構造化</p>
	<p>家族員の健康状態や日常生活に対する援助の必要性や今後新たな健康問題を生じる可能性がないか判断                      家族員の子育てに対する対処能力の見極め、家族員の考えや家族員どうしの関係性が児に及ぼす影響の判断                      社会資源および周囲の人々との関係の判断</p>	<p>個々の家族員の援助ニーズを明確にする</p>	
援助の方向性	<p>援助の目標や具体的な援助方法を家族員と共に考える                      個々の家族員の子育て、社会資源、セルフケアに対する意向、他の家族員に対する家族員の意向を尊重する                      家族員の対処能力、これまでの生活スタイル、家族員どうしの関係を理解し、家族員に無理のない方法を選択する</p>	<p>家族員の主体性を重視する</p>	<p>今後の家族の姿を家族員と共にイメージする</p>
	<p>児と家族員の望ましい関係をイメージ、子育てに向かう家族員の望ましい気持ちや態度、家族員どうしの望ましい関係をイメージ</p>	<p>今後の家族の姿をイメージする</p>	
	<p>個々の家族員の健康問題と子育てとの関連を検討し、どのような援助展開が家族員にとって有効か検討する                      個々の家族員に向ける援助が、他の家族員との関係に影響を及ぼす可能性(効果)を検討する                      個々の家族員に向ける援助が、家族全体としてどのような効果が期待できるのかイメージする</p>	<p>個々の家族員の援助と家族全体に対する援助との関係をイメージする</p>	<p>援助の展開をイメージする</p>
援助方法	<p>可能なかぎり個々の家族員との面会を試みる、家族全員を援助の対象としている援助姿勢を伝えようという判断</p>	<p>家族員一人ひとりと信頼関係を築く</p>	<p>家族に対する援助姿勢</p>
	<p>現在捉えている家族員の情報がどの家族員から得ている情報なのかを意識する、可能な限り個々の家族員から情報を捉えようとする努力、中立の立場で事実を観察する重要性を認識する</p>	<p>中立の立場で関わる</p>	
	<p>家族員どうしの関係性は、これまでに培われたものとして理解するとともに、将来を見据えて関わる重要性の認識</p>	<p>家族生活の継続性を認識する</p>	
	<p>発育発達状態を確認する、児の発達上の課題を理解する、生活体験を豊かにする</p>	<p>児の発育発達を促す</p>	<p>児の日常生活を整え、発育発達を促す</p>
	<p>生活リズムや室内環境に対する助言、幼稚園生活への適応過程を見守る、近隣環境の確認</p>	<p>児の子育てに適した環境を整える</p>	
	<p>家族員が適切な保健行動がとれるための助言、健康管理の意識を高める</p>	<p>家族員の健康管理を促す</p>	<p>個々の家族員のセルフケアを高める</p>
	<p>家族員の健康問題や日常生活に対する不安・他の家族員への気遣いやストレス・子育てに対する悩みに対応し、不安の軽減を図る</p>	<p>家族員の精神的安定を図る</p>	
	<p>生活リズムの確認、家族員の満足した生活を支える</p>	<p>家族員の日常生活を支える</p>	
	<p>家族員の気持ちを受けとめる、共感する、これまでの子育ての労をねぎらう、工夫や努力を認める、自信を促す</p>	<p>家族員の意欲を高める</p>	<p>家族員の問題解決能力を高める</p>
	<p>児に対する家族員の認識を理解する                      児のよさを伝える、児に対する認識を家族員が理解する必要性を伝える、児に対する関心を高めるために発達相談を活用する</p>	<p>児の課題に対する認識を高める</p>	
	<p>子育てに関する知識・情報の伝達や助言、解決策の提案</p>	<p>家族員の子育てに対する対処行動を促す</p>	
	<p>過去に家族の力が発揮された経験を捉える</p>	<p>過去の経験を生かす</p>	
	<p>家族員の果たしている役割を評価して伝える、家族員の果たしている役割を他の家族員に認識させる、家族のなかで新たな役割を果たそうとする気持ちを支持する</p>	<p>家族員どうしの役割認識を高める</p>	<p>家族員どうしの結びつきを強める</p>
<p>他の家族員の立場での代弁や理解を促す問いかけを行う、家族員の好ましい変化を伝え他の家族員の理解を促す</p>	<p>家族員どうしの相互理解を促す</p>	<p>外部支援資源との調整を図る</p>	
<p>児が利用している幼稚園の受け入れ状況や発達相談内容の確認、発達相談の機能を家族員への支援に生かす、十分な効果を上げるための発達相談員との事前の連絡調整</p>	<p>社会資源が児および家族員にとって有効に機能するよう調整する</p>		
<p>家族員に子育てに影響を及ぼす可能性のある近隣・職場・周囲の人々との交流状況を捉え、その関係を支持する</p>	<p>家族員と周囲の人々との結びつきを強める</p>		
援助の評価	<p>看護職に対する対応、訪問時の様子から家族員が看護職を快く受け入れているか、拒否していないかを判断</p>	<p>家族員の看護職の受け入れ状況を判断</p>	<p>看護職と家族員との関係を判断する</p>
	<p>看護職に対する相談態度や相談内容から家族員が看護職を援助者として認めているかを判断</p>	<p>援助者として家族員が認識しているかを判断</p>	
	<p>看護職の提案に対する家族員の反応、家族員側からの主体的な相談の求めの現れ、家族の問題を看護職とともに見つけようとする姿勢の現れから看護職と家族員の関係性がパートナーシップへと向かっていることを判断</p>	<p>パートナーシップの関係形成に向かっているかを判断</p>	

	看護職の思考内容	サブタイトル	タイトル
援助 の 評 価	幼稚園生活の不適応状態から適応状態への変化, 生活体験の広がりから児の生活の質の変化を判断 健康問題の改善, 家族員の不安の軽減, 社会性の拡大に伴う家族員の精神的安定, 家族員の満足する生活の獲得から家族員の生活の質の変化を判断	個々の家族員の生活の質の変化を判断	家族の変化を判断する
	家族員の工夫や努力の現れ, 自信の現れから家族員の意欲の変化を判断 児への関心の高まり, 児の成長の認識, 児の課題は家族全員の課題の表れから児に対する家族員の認識の変化を判断 適切な対処行動の現れ, 児の生活体験を豊かにする関わりができるようになったこと, 児の気持ちを理解した関わりができるようになったことから家族員の子育てに対する対処能力の変化を判断	家族員の問題解決能力の変化を判断	
	家族内で自らが果たすべき役割を見い出そうとする姿勢の現れ, これまでほとんど子育てに関心のなかった家族員の子育てへの参加から家族内での役割分担の変化を判断 他の家族員に対する理解の深まりを判断 家族員どうしのコミュニケーションの質の変化を判断 家族員どうしの絆の確認	家族員どうしの関係性の変化を判断	
	発達相談後の児の変化, 発達相談活用による家族員の変化から児および家族員の社会資源活用の効果を判断 家族員以外の周囲の人々との関係の変化を判断	家族員と社会との関係性の変化を判断	
	家族員の気持ちや状況に適した援助ができたことを判断, 充分実施できなかった援助を判断, 実施した援助が家族員の負担になったのではないかを判断	実施した援助が家族員にとって適切であったかを判断	
	実施した援助を意味づけて評価する	実施した援助を意味づける	

援助ニーズに関する思考内容からは, 2つのサブタイトルがつけられ, さらに「援助ニーズの構造化」というタイトルがつけられた。援助の方向性に関する思考内容からは, 3つのサブタイトルがつけられ, さらに「今後の家族の姿を家族員と共にイメージする」, 「援助の展開をイメージする」という2つのタイトルがつけられた。援助方法に関する思考内容からは, 16のサブタイトルがつけられ, さらに「家族に対する援助姿勢」「児の日常生活を整え, 発育発達を促す」「個々の家族員のセルフケアを高める」「家族員の問題解決能力を高める」「家族員どうしの結びつきを強める」「外部支援資源との調整を図る」という6つのタイトルがつけられた。援助の評価に関する思考内容からは, 9のサブタイトルがつけられ, さらに「看護職と家族員との関係を判断する」「家族の変化を判断する」「実施した援助を判断する」という3つのタイトルがつけられた。

## V. 考 察

### 1. 家族の捉え方

援助ニーズに関しては, 児に生じている問題および他の家族員一人ひとりに生じている問題を, それらが生じている原因や背景, その問題が及ぼす影響から明らかにしようとしていた。その際には, 児と他の家族員との関係, 家族員どうしの関係, 家族員以外の周囲の取り巻く人々との関係という3つの視点から検討し, それらを家族全体として構造化しようとしていた。

援助の方向性に関しては, 家族として今後どのような姿を目指すかという家族全体を捉えた視点から, 個々の家族員一人ひとりに向けて援助の展開を考え, その結果家族全体としてどのような効果が期待できるかをイメージしていた。

援助の方法に関しては, 個々の家族員, 家族員どうしの結びつき, 家族員と外部支援資源との関係に向けて援助しようと思っていた。しかし, どのように

働きかけるかという具体的な援助方法は、個々の家族員と利用している社会資源に向けたものであった。

援助の評価に関しては、個々の家族員の変化、家族員どうしの関係の変化、家族員と社会との関係の変化という3つの視点から家族としての変化を実施した援助との関係から評価していた。

看護過程はこの繰り返しであることから、看護職は、家族員一人ひとりを捉える視点、家族員どうしの関係性を捉える視点、家族員と社会との関係性を捉える視点、それらを家族全体として統合する視点を何度も往き来しながら、家族を捉えていくという思考の特徴が見いだされた。この結果は、鈴木ら<sup>5)</sup>の、家族を援助する際には、個々の家族成員一人ひとりを深く見つめる視点と、家族の関係性や、一単位としての家族を見つめる視点の両者を持ち、個から家族全体へ、また逆に家族全体から個へと、カメラのズームを変化させるように自由自在にその視点を変化させる柔軟性をもたなければならないということと基本的に一致する特徴と考える。

## 2. 家族援助のあり方

### 1) 家族に対する基本的援助姿勢

援助方法に関する思考内容から家族に対する援助姿勢が抽出された。その内容は、家族員一人ひとりと信頼関係を築く、中立の立場で関わる、家族生活の継続性を認識するというものであった。看護職と家族員との関係は、援助の評価のなかでも重要なものとして位置づけられていた。看護職と家族員との信頼関係の評価は、最終的には「パートナーシップの関係形成に向かっているか」に表されると考えられるが、そのことは援助の方向性のなかでも、家族員の主体性を重視していることとも関連しているといえる。患者一看護婦の人間関係が看護の基盤としている Peplau<sup>6)</sup>は、看護のプロセスに関して、看護婦と患者が未知の状態から相互に接近し、相互に理解しあい、患者が他者、特に看護婦の助力を得て自ら問題解決にあたるようになるまでのプロセスをいう、としている。このことを家族と看護職との関係におきかえ

てみると、家族が自ら問題解決にあたるようになるためには、やはりその構成家族員一人ひとりと信頼関係を築いていく姿勢が必要だと考える。

中立の立場で関わることは、特定の家族員からの情報や認識だけで援助を考えるのではなく、事実をありのまま見つめることや、可能なかぎり個々の家族員から情報を得ようとする思考内容の特徴であった。それによって、特定の家族員に荷担することなく、看護職が関わることによって家族員どうしの葛藤をさらに助長させるということを防いだり、適切な判断が可能となることで、援助の可能性が広がることにつながると考えられる。

家族生活の継続性の認識については、家族員どうしの関係性は、これまでに培われたものとして理解するとともに、将来を見据えて関わる重要性を表す思考内容の特徴であった。家族にはこれまでの歴史があり、今の家族員どうしの関係や生活のありようは、長い経過のなかで培われてきたものである。そのことを理解した援助でなければ、看護職の援助の押し付けとなりその家族には受け入れられないことになる。さらに家族員に将来の家族の像をイメージさせる援助は、家族員が今の生活を見つめなおし、今後家族員自身がどうしていくことが必要かを自ら考える援助につながると考える。このことから、看護職は長い家族生活の営みのある一時点に関わるということや、家族は変化し続ける存在であることを十分に認識することが重要と考える。渡辺らの、家族の対処行動を促した看護職の認識の特徴に関する研究<sup>7)</sup>では、看護職が時間と空間とを越えた広がりをもっていたと述べているが、ここではこの時間の広がりへの認識の重要性が確認されたといえる。

### 2) 家族援助の目的と意図

本研究では、児に対して、発育発達面、日常生活面、幼稚園という社会生活面、近隣環境に注目しながら、児の日常生活を整え発育発達を促すことを意図して援助していた。他の家族員に対しては、健康管理面、精神面、日常生活面およびそれに伴う認識に注目しながら個々の家族員のセルフケアを高めることと、

子育てに対する意欲, 児への認識, 子育てに対する対処行動, 過去の経験に注目しながら家族員の子育てに対する問題解決能力を高めることを意図していた。さらに家族員どうしの結びつきを強める, 外部支援資源との調整を図ることによって家族全体としてのケア力を高めることを意図していた。

看護における家族援助の目的は, 家族の健康の向上<sup>8)</sup>であるが, この目的の意味と本研究で意図していたことを考え合わせてみる。吉田によると<sup>9)</sup>, これまでに行われた研究からは, 社会心理学ばかりでなく看護学においても, 家族の健康は家族機能の良好な状態と考えられ, 家族機能を評価する尺度が開発されてきている。しかし, これについて吉田は, 家族の健康を家族機能だけで評価すべきではないと指摘している。筆者も, 同様の観点から以下のように考える。家族の健康の基盤は, やはり家族員一人ひとりが, 豊かな健康生活を送れているかに焦点をあてることではないかと考える。そしてそのような個々の家族員の健康生活を家族員どうしが互いに認め合い, 支えあつて維持していくことが健康な家族のあり方ではないかと考える。そのためには, 家族機能が良好な状態に保たれるために, 家族員が統制されることがあつてはならないと考える。このことは, 従来から公衆衛生看護のなかで追究されてきた考えでもある。さらに, 看護職が描く健康な家族のあり方を, 援助をとおして家族に押し付けてはいけないということを強調したい。家族に対する基本的援助姿勢のなかでも述べたが, 家族の生活のありようはこれまでの長い経過のなかで培われてきたもので, そのなかで育った個々の家族員の家族観が混在している。また現在は多様な家族の形態が存在する。そのようななかで家族に対する援助は, 看護職の理想とする家族のあり方で評価することを避け, 予測できない家族の持つ力や変化の可能性を探り, 個々の家族員の力を引き出し, 高めていくことが重要ではないかと考える。

## VI. おわりに

今回の研究対象は1事例であつたが, 自ら実施した家庭訪問援助過程における思考内容を詳細に分析することによって, 家族援助における思考内容の特徴を導くことができた。しかし, 今回の分析対象は, 援助の受け手となる家族員が, 軽度発達遅滞のある幼児であつたことから, 自らの気持ち・思いを表現することが困難という特徴があつた。そのため今後は, 援助の受け手の気持ち・思いを十分に捉えた援助事例をさらに加え, 家族援助実践の根底となる看護職の思考を明らかにしていきたい。また, 看護職の思考を実際の援助との関連で明らかにしていくことも必要と考えている。

〔受付 '02. 4. 5〕  
〔採用 '02. 12. 14〕

## 文 献

- 1) 鈴木和子・渡辺裕子共著: 事例に学ぶ家族看護学第2版, 3, 廣川書店, 2000.
- 2) 鈴木和子: 家族看護研究の動向と今後の課題, 看護研究, 34 (3): 19-26, 2001.
- 3) 吉田千文: 家族看護における複雑性と看護研究, Quality Nursing, 6 (11): 10-16, 2000.
- 4) 佐藤紀子: 家族員一人ひとりの援助を基盤とした家族援助のあり方, 千葉看護学会会誌, 8 (1): 15-21, 2002.
- 5) 鈴木和子・渡辺裕子: 家族看護学実践と理論, 84, 日本看護協会出版会, 1997.
- 6) Hildegard E. Peplau 著, 稲田八重子他訳: INTERPERSONAL RELATIONS in NURSING, 医学書院, 1994.
- 7) 渡辺裕子他: 家族を対象とした看護過程における看護職の認識の特徴, 千葉大学看護学部紀要, 16: 81-93, 1994.
- 8) M.M. Friedman: Family Nursing. Theory and Assessment, 野嶋佐由美監訳: へるす出版, 28, 1993.
- 9) 吉田千文: 前掲3)

## Characteristics of Cognition of Nurse Regarding Family Nursing

Noriko Sato

Doctor's course, Graduate School of Nursing, Chiba University

**Key words :** family nursing ; cognition of nurse ; home health care

The purpose of this study was to identify the characteristics of cognition of nurse regarding family nursing.

Data in the study comprised the thoughts and feelings expressed by a nurse between home visits regarding a family supported within the researcher's own practice of home health care. Participants in the study comprised one family with children. Qualitative analysis of data regarding the nursing process was performed and considered from the perspective of understanding and supporting the family through nursing.

The characteristics of cognition of the nurse regarding family nursing were as follows :

1. Attempts to understand the family were made by focusing on each family member, relationships among members, relationships between members and the community, the family as a whole, and maintaining the flexibility to change these focus points through the nursing process.
  2. Emphasis on interactions with all family members, intervention only from a neutral stance, and consideration of the continuation of family life as the basic attitude for nursing.
  3. Intention to support the health and comfort of each family member, and to enable family members to maintain their own lives by affirming and supporting each member.
-